



YEG

青年部だより

3月号

全文は  
こちらから



### 会員親睦事業オンライン（ZOOM）開催！

12月9日、会員個々の繋がりを深め、気軽に相談し合える仲間を作るきっかけとすることを目的とし、オンライン（ZOOM）会員親睦事業を行った。

10分毎に1対1で計5回フリートークを行い、新入会員から現役会員まで広い範囲で交流した。

フリートークを行った後、「今後も交流を深めていきたい会員」のアンケートを行い、相思相愛で結びついた会員のカップリング発表を行った。

オンライン開催であったがこの瞬間は大変盛り上がり、5組のカップルに拍手が送られた。この事業を設えた会員親睦向上室の辻室長は、「まだ喋りたいという会員も多く見られ、今回の事業をきっかけに今後もしっかりと会員一人一人が密となつて研鑽と交流をしていきたい」と語った。

またカップリング成立した会員親睦向上室の荒木室員は、「この事業がきっかけとなって、今では企業コラボが実現している。食や和を通してお客さんに喜んでもらえる場を一緒に提供したい」と語る。

この事業で会員同士が親密になり、今後業種を超えて連携していくきっかけとなった。

記者 熊野皓太



令和3年12月4日(土)に富山県総合福祉会館とZOOMにて富山県商工会議所青年部連合会ビジネス交流事業が開催されました。私自身も参加させて頂きましたが、設えを担当されていきました、江成ビジネス交流委員に当日や事業について取材致しました。

先ずはビジネス交流事業ということで、このコロナ禍の中でも会社にとつての新しいPRの潮流、YEGメンバーによる単会を越えた繋がり、エンジェルタッチの活用と大変得るものが多い例会でしたが、こういった着想でこの例会を設える事になったのかをお伺い致しました。

先ずベースとしてビジネスマッチングを考えており、会員同士の繋がりを増やす事に主眼をおいた例会にしたいという思いがあったそうです。そこで日本YEGでエンジェルタッチの活用を推奨しておられる日本YEGビジネス交流委員長の矢野講師に来て頂きました。そこでエンジェルタッチの活用としてビジネス交流広場にて自社のPRをし、活用する方法をお教えいただきました。

次に第2部では自社のPRをするにあたり、PRの方法をしっかりと学ぶべきではという検討の場があり、今の時代に企業が求められているもの、所謂、ブランディングはどうするかということ、株式会社リクルートに勤めておられて、編集長経験もある藤井講師と博報堂執行役員でクリエイティブディレクターである嶋講師をお招きする事になったそうです。

第2部には私も出席(オンライン)させて頂きましたがSDGsと昨今の企業PRの在り方について非常に勉強になりました。社会問題に焦点を当てたPRが持続的な自社の広報、地域社会への浸透という関連性には自分の考え方が古かったなと改める機会になりました。

第3部では1部、2部の内容を活かし、実際にエンジェルタッチにPRページを作る形にしようという流れで今回の例会を考えられたそうです。

当日はコロナ禍ということで、現地の会場入りする人数を制限し、ウェビナーをつかって例会の内容を視聴していただき、グループワークはオンライン、現地の人は会場レイアウトを転換しグループワークと動線の他にも配慮するべき点がありそうだなと感じましたが担当されていた江成委員は事前の名簿作成から会場転換のリハーサル、ウェビナー転換のリハーサルと合わせてしっかりとやられていたそうで滞りなく運営できたそうです。

最後に例会に参加された方は非常に満足いく内容の例会だったと思うのですが、委員会としての思いは反映できたかと質問したところ、コロナ禍で直接会う機会が減ったからそのアイディアで例会のPR動画をみんな撮ろうという試みをし、それを組み込みましたというお返事を頂きました。運営と参加者、両方が良かったと思える、良い例会だったと私は感じました。



連載

どんな人ながか知ってるけ？  
青年部会員紹介！

日々頑張っている、あこんこの  
アンちゃん、ネエちゃん砺波で  
こんな活躍しています！

「ゆっくりでも止まらなければけっこうすむ」

大谷 忠史（監事）

事業所 大谷工業（株）

笑顔が素敵ないたずら好き。私が青年部に入会して最初に抱いた大谷さんの印象だ。

今回は砺波商工会議所青年部第54代会長、大谷忠史さんにインタビューさせて頂いたのでご紹介したいと思います。

富山県砺波市鷹栖育ち。AMラジオと音楽が好きなとても大人しい性格の幼少期だったと大谷さんは当時を振り返ってくれた。

かと思えば小学校では1年～3年生は剣道、4年～6年まで・算盤・ボーイスカウト・野球・サッカー・水泳・バスケット「やる事多ないですか?」とこちらが聞いてしまうほど多くのクラブ活動に入部されていたそう。理由を伺うと「鷹栖小学校は入学したら全部やらんなあかんが」と言っていた。驚きである。

中学校に入学するとソフトテニス部に入部。中学2年時には市体で優勝するほどの選手だった。中学校時代はテニスに打ち込んだ大谷さん。高校は井波高校に進学するのだが進学先の井波高校にはテニス部が無かった。大谷さんがとった行動はテニス部を創部するという事。同級生と共に先生に何回も頼み込んでなんと1年時の秋前には創部にこぎつけたのだ。無ければ作る。大谷さんの行動力には本当に驚かされる。

高校時代に初めてギターを買ってもらい町内から苦情がきた話をしてくれた。「小学生の時から音楽が好きでシンセ欲しかったけど弾けないと思いギターを。毎日アンプにつないで弾きまくっていた」楽しいからついつい夢中になっていたそう。

もともと料理人になりたかった（中学校の進路では調理科に進学したかったが止められた）大谷さんは家業を継ぐつもりは全くなかったが、名古屋の配管専門科がある東海工業専門学校に進学し家業を継ぐための勉強をすることとなる。建築設備科で学ぶ傍ら2級建築士の資格も卒業時には取得されたそう。

21歳で修行先である富山市の企業に勤める事になるのだが、当時インラインスケートホッケーにはまっていたそうで社会人チームを人生2度目の創部。

26歳で大谷工業に入社されたそう。30歳の時に結婚し商工会議所青年部にも入会された。地元先輩に誘われての入会だった。43歳時には会長にも就任し現在は監事の職に就いておられる。

青年部で一番ひどかった思い出を聞いてみた。「50周年の安城へのマラソンの企画が一番ひどかった」安城マラソンとは砺波商工会議所メンバーが襷を繋いで安城商工会議所まで250km走って向かう企画の事だ。大谷さんは部会長としてその企画の全てを担っておられた。

「メンバーの安全が一番だから安城までのコース選定が一番気を使った。途中で何かあったら大変だからね。3県の県警にも相談したし、何回も走る想定時間に現地を確認しにいっ

た。名古屋まで」

最後に息子さんに跡継ぎをしてほしいか聞いてみた。「好きなことやってくれればいいよ」さまざまな事に興味を持ち、実際に行動に移し、経験をしたことを自分が前に進むための糧とする。大谷さんが好きな言葉、國仲仁の「ゆっくりでも止まらなければけっこうすすむ」この言葉をもってインタビューを終えさせていただきます。

記者 渋谷 康佑

メモ

家族構成 妻・息子（12歳）

趣味 デスクトップミュージック・全国水族館巡り・星野写真

好きな食べ物 ひつまぶし・味噌煮込みうどん

好きなアーティスト eric prydz・Charlotte de Witt



## 連載 青年部会員紹介!

日々頑張っている、あこんこの  
アンちゃん、ネエちゃん砺波で  
こんな活躍しています!

「『好き』を仕事に」

朝倉 義晴 (監事)  
事業所 (有) 砺波飼料

富山県下全域における家畜の飼料販売を幅広く手掛ける有限会社砺波飼料。その代表取締役として多忙な日々をおくる中でお話を聞かせてくださったのが、今回の記事の主役の朝倉義晴監事だ。

出町小学校・中学校、高岡第一高等学校を卒業後、東京農業大学に進学。農学部畜産学科では研究対象として家畜の血液を専攻する。実際に多くの動物に接する実習と、専攻を中心にした研究から現在の業務にも活かせることを本当に多く学んだ日々だったという。またお話の中で、同社が掲げる目標として顧客利益の追求を実現するために「飼料の有効活用、安定供給」をあげられていたのだが、東農大畜産学科のホームページにも「食料の安全で安定的な供給を科学的に探究すること」とあり、家業と考える方向性を同じくする学びの場での経験は今の朝倉監事にとって非常に貴重なものだったのであろうと想像させられた。

学生時代には現在でも多忙な中、プライベートな時間を割いて楽しんでいる競馬を始め。家業、学びの場、そして趣味といつも中心には馬や動物の存在があり、好きが仕事でもあることが、朝倉監事にとつてのエネルギー源であることが感じさせられた。

大学卒業後は、ご家族の病気のため、すぐに富山にもどり家業を継ぐことになる。家業であり子供のころから知った環境とはいえ、仕事を始めた直後はうまくいくこと、いかないこと様々な経験をする。そんな中でもうまくいかないとき、やはり立ち返るのは学生時代における学び、そして、「好き」が仕事であるということだった。

現在、砺波商工会議所青年部では監事という立場にあるのだが、平成17年の入会后、副会長、専務理事、各委員会の委員長と多くの役職も務めてこられている。特に、出町小学校時代にはミニバスケットボールのチームに所属していたのだが、このミニバスチームには青年部の同期も多く所属しており、現在でも公私において多くの活動を一緒にする仲間もある。青年部の活動というのは本業が忙しいタイミングであっても時間や労力を割かねばならないことも多々あるが、そのような中でも同期の存在は自身に対して気付きやモチベーションを与えてくれる貴重なものであると聞かせてくださったのがとても印象的であった。

記者 竹正 恵祐



メモ

昭和51年5月14日生（四十五歳）

家族構成 妻・息子・娘

好きな食べ物 肉（肉ならなんでも）

甘いもの（甘い飲み物、食べ物は毎日欠かさず摂取している）

趣味 競馬

野球観戦（ヤクルトファン）

ビーチボール（出町中ではビーチボール部に所属。

この部活仲間と大会にも参加）